

海外 論文 レポート

イタリア社会的 協同組合の旅

齋藤縣三（共同連／わっぱの会）

1. 2つの目的

今回の旅（2002年11月）には2つの目的があった。1つは前回訪れたCGM（ジーノ・マッタレリ社会的協同組合全国連合、ジーノ・マッタレリとは社会的協同組合の父といわれる国会議員の名である。）の前会長リビア・コンソロさんに勧められたCGM運動の中心地、ブレシアの社会的協同組合を見ることがである。

もう1つは、これも前回訪ね、最も共感したカーボダルコ電子工業という協同組合の仲間の他のローマにある協同組合を見ることがであった。カーボダルコ運動（※注 最後に詳しく説明する。）は1965年に始まった独自の障害者参加の共同体運動であり、ローマを中心に各地に広がっており、前回は時間がなくてその1つしか見ることができなかった。

そして、今回は共同連（障害のある人ない人の共働事業所をすすめる全国連合、一般の共同作業所運動とは違う、1984年結成）のメンバーを中心に、国会議員、学者、研究者、実践者など多様な顔ぶれによる訪問団となった。（実は労協連とも共催で呼びかけていたのだが、今回は残念ながら1名のみ参加であった。）

まず前半で、CGMのブレシア本部その周辺の社会的協同組合を訪ねることになった。前回、ローマで見たコンフコープ（イタリアの四大協同組合ナショナルセンターの1つ、白い協同組合といわれるカソリック系）に属するある社会的協同組合をみて、日本の親がつくる小規模作業所と全く同じでがっかりしていた時に、リビア・コンソロさんからイタリア北部では自動車や機械金属関連の工場やコンピューター関連の工場などに経済的にも確固とした社会的協同組合がいっぱいあると聞かされていた。しかし、計画した日程は運悪くCGMのローマで開かれる全国セミナーの日と重なり、主だった幹部はローマに行っているという。そのせいか、最初の訪問地はブレシアから離れたベルガモの社会的協同組合まで足を運ぶことになった。

2. アエベル社会協同組合

そしてなぜか、私たちの見学できたのはA型の社会的協同組合であった。あれほど強くB型社会的協同組合の見学を望んでいたのに。社会的協同組合は2種類あり、A型は高齢者、障害者、児童への社会サービス等のサービス協同組合、B型はハンディキャップ

を持つ人を30%以上含む労働協同組合とくっきり分かれている。私たちのつくっている共働作業所はこのB型にあたるのであり、そのB型組合の経済的な発展可能性や、障害者参加の現状をなんとしてもつかみ取りたかった。

しかし、思わぬ収穫もあった。それは精神医療改革についての取り組みである。アエペル社会協同組合、児童、若者、女性、障害者への社会サービス、教育サービスなどを行なうA型組合で、アソシエーションから発展して1988年に組合員24名で結成された。その1つの事業である精神障害者を対象としたコムニタ(=共同生活体)プロテッタ、フィオリータピラを見学することができた。イタリアでは精神病院は全て解されており、北部の社会的協同組合はその受け皿として、大いに貢献していることは既に聞いていた。

精神病院の廃止により、この地域に80人の精神障害の長期入院者がいた。4つあるその受け皿の1つとして1999年に生まれたのがこのコムニタである。このコムニタの運営のため、医師や看護婦などの専門職員が雇われていた。生活者は13名、生活は自由意志を尊重し、個々プログラムがつけられて、街にも自由に出かけられるとの話であった。入口には鍵がかけられていたが、それは勝手に出て行く人を防止するためとの説明があった。比較的高齢であり、誰も仕事はしていないが、これからより若い精神障害者のために地域の企業と連携して仕事をつくりだしていきたいとのことだった。

イタリア全土では1978年、法律により精神病院の廃止がうたわれ、州ごとの法によって2000年には全国で精神病院がなくなった。このロンバルディア州では3種類のコムニタがあり、プロテッタの度合いにより、

一番低レベルのものは2名からつくられるが、まだ数は少ないとのことであった。(サルディーニャ州には2つのタイプがあった。)このコムニタは一番高レベルのものであり、だから職員も多く、定員も13名と定められていた。

こうした現実を見ると精神病院の解体といっても、病院に代わる地域の施設の中で職員の世話を受け、管理下にあるという面は否めない。しかし、今も何百人もの精神障害者を収容する精神病院が多数ある日本とは天と地ほどの差である。職員の説明の間も、私たちと一緒に障害者の人たちも過ごしていたし、その職員、みんなも一緒に参加していることを覚えておいてほしいと強調していた。22年かかって精神病院をなくし、地域での生活を社会的協同組合が担っていることの意義はとてつもなく大きい。

3. CGM本部とアンドロポリス社会協同組合

ブレンシアではCGM本部とB型社会的協同組合を訪ねることができた。

1年前には連合会数50(40)、単協数800(767)、労働者数21,000人(16,000人)、ハンディを持った労働者数1,700人(1,700人)、ボランティア数(社会的協同組合にはボランティア組合が認められる。)3,900人(3,700人)であった。[※2000年の数、()内は1999年の数。]それが2001年には連合会数72、単協数1100以上、労働者数2,300人、ハンディを持った労働者数1,800人、ボランティア数4,000人と着実に発展していた。

単協の中でA型は6割、B型は4割。第3セクターとして社会的役割は一層高まっているのであろう。特に連合会や単協の数が

めざましく増えているのは、増加分以上により小さな組織へと枝分かれしている証拠である。単協の組合数は最低9名から30名、平均で15から20名という。こうした傾向はコンフコープが顕著なようである。

CGMは連合会各単協に対して、人材育成、仕事保障の面で多大な貢献をなしており、広くEU本部のあるブリュッセルにも事務所を置き、EUの仕事をとる努力もすすめている。

ようやく訪問できたB型社会的協同組合アンドロポリスは1989年にできた組合で、この一つの事業所であるクリーニングの工場を見学した。組合員数85名を含む136名が働いており、その内45名がハンディを持っているとのことであった。クリーニングは5つの公立病院と老人施設からの仕事を請け負っており、24名の組合員が働いている。クリーニング以外ではメンテナンス事業に75名、速記入力の仕事に18名（視覚障害者の人を中心に）が就いている。その他に5名の職業訓練生も受け入れている。ここ10年間で115名のハンディを持った訓練生を受け入れており、内80名が一般企業等に内定したという。

社会的協同組合では、職業訓練コースをもつ所が結構あり、自らの組合にそのまま働く人を確保することができるのみならず、他の社会的協同組合や一般企業に人材を送り出している。この点はハンディを持った人への職業教育機関がほとんど整備されていない我が国が参考にすべきである。

クリーニング業は日本でも、知的障害者や精神障害者の就労先として広く活用されており、その点、この工場で働く人々の障害程度は軽いように見受けられた。また説明の中では、やたら職業訓練のことが強調さ

れ、障害のある人も共に働くという認識が薄いように感じられ、そのことがすごく気になった。

ブレシアの旅は、当初の期待に反して、事業としての経済発展をどう社会的協同組合が作り出しているのかをみることはできなかったというのが、正直な感想である。

4. ローマにおけるCO.IN.の活動

ローマではレガコープの本部（“赤い協同組合”といわれ、旧共産党系のナショナルセンター。この系列の社会的協同組合は、コンフコープ系と比較すれば、より企業的性格が強く、一組合規模もより大きい。）を訪ねた後、カーボダルコ運動の関係の協同組合を訪ねることができた。一つはダンデム社会協同組合であり、もう一つはカーボダルコ運動のコールセンターであった。

どちらもCO.IN.（統合労働協同組合。社会的協同組合法が1991年にできる以前にカーボダルコ運動が中心となりローマ市を含むラツィオ州で独自につくられた障害者参加をすすめる労働協同組合の連合体であり、州からの援助を受けている。）に属する組合であり、その名の統合労働にあるように、障害者、非障害者の統合にこだわりをもって生まれた連合体で、50の単協により構成されている。

どちらも身体障害者を中心に運営されているが、ダンデムは1997年に生まれた組合で、障害のある人が普通に観光できるような観光情報を流すことを出発として、広く障害者の生活相談に対応する事業を行っている。組合員35名、その半数がハンディのある人で、障害のある、なしにかかわらず、時給は同じである。

能力による差別を行わないのが、CO.IN.の特徴といえるのかもしれないが、前回、お会いしたカーボダルコ電子工業の代表者ドナーティさんが最も強調していたことでもあった。カーボダルコのコールセンターでドナーティーさんと再会することができたが、その協同組合は今年、既に倒産してしまっていた。1年前には公共交通機関の電子表示システム当の事業により、順調に事業展開をしていたのだが、詳しくは聞くことができなかったが、エレクトロニクスの部門で厳しい競争に勝ち残れなかったということのようである。

その点、コールセンターの方はもともと、カーボダルコ窯業協同組合が時代の状況に応じて大きく事業転換した結果の成功例としてある。1991年、400名を越す組合組織となり、今日に至っている。今日、ラツィオ州の全ての病院の予約窓口として、その電話業務を全て引き受ける事業をしており、そのために更に人材募集も行っている。

CO.IN.のもつ、能力主義を乗り越えた、協同の思想とその実践を学ぶため、来年8月、共同連の第20回大会（大阪）には、その代表者、マウリツィオ・マロッタさんを招請することとしている。わたし共の協働事業所運動とイタリアの社会的協同組合の結節点が一層明らかになることを強く願うものである。

（※注、カーボダルコ運動は、1966年のクリスマス之夜、カーボダルコ地区の廃屋に集まった13人の障害者と神父によって始まった共同体運動であり、今日、ローマ市内だけでもいくつもの社会的協同組合やコミュニティを有し、イタリア国内にとどまらず、南米などの海外にまで広がっている。そして1988年、ラツィオ週にCO.IN.という連合体を生み出した。）



